

名 称	能登町子どもの居場所づくり支援センター
所在地	〒927-0602 石川県鳳珠郡能登町字松波13-75
連絡先	TEL : 0768-72-2510 FAX : 0768-72-2393

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 旧内浦町 8, 000人

平成17年3月1日内浦町、能都町、柳田村の三町村が合併して出来上がった能登町は、石川県の能登半島先端部に近く、富山湾に面したところに位置している。東と南を海に囲まれ、かなたに立山連峰をのぞむことができる。町内の海岸線には天然の良港が点在し、漁業が盛んで近海から遠洋まで様々な漁で獲れた魚たちが食卓を飾る。北部を中心として稲作が行われ良質米を生産している。また、野菜やイチゴ、ブルーベリーの栽培など、第1次産業が産業の中心となっている。そのため、人口減少が激しく、少子化のあおりを受け毎年のように学校の統合問題が持ち上がっている。平成15年に開港した能登空港を利用した観光客誘致にも力を入れているが、その努力はいまだ実を結んでいるとは言い難い。水車の里と呼ばれる木郎地区（不動寺地区）は旧内浦町の山沿いにあり、現能登町となった旧三町村が交わる場所に位置し、交通の便も不便なため高齢化率が急速に進んでいる過疎の地である。

コーディネートした事例の名称、概要、特色

名称 「水車の里活性化活動」

木郎地区の人々の心のよりどころであった不動寺小学校は、昭和46年に松波小学校に統合となり廃校となった。その後、校舎の一部は魚網修理工場として地域雇用に大きく貢献してきた。しかし、200海里問題以降の漁業不振で工場自体も閉鎖され廃屋となっていった。地域住民の心のよりどころが無くなり、住民の足は他の商業地域に向きがちであった。

このままでは地域は死んでしまうとの危機感から、この廃校舎を、地域住民の交流の拠点として、少しでも賑わえる場所、自己実現できる場所にしようと、平成8年11月に所有者よりもらい受け、地区有志がボランティアとして清掃修理を行った。そしてこの建物を「木郎活性塾」と名付けた。同時に不動寺小学校同窓会を再結成し、地区住民の年会費をもって建物の維持管理をすることになった。

「木郎活性塾」の活用方法については、古民具の展示や、地区体育祭の用具保管などであった。他の用途を摸索していたところ、同窓会役員が当時の内浦町教育委員会ボランティア

担当者とタイアップして、平成9年4月オカリナのコンサートを開催することになった。集まったたくさんの子どもの歓声とともに、木造の校舎に素敵なオカリナの音色が響いた。

このとき集まった地区住民が中心となりボランティア団体「ピノキオ」が誕生した。「ピノキオ」のモットーは「おとうさん・おかあさん・こども」が共に楽しむことのできる地域づくり活動であった。また、「ピノキオ」に所属するおかあさんのほとんどは、地区公民館の「アリスの会」にも所属しており、公民館活動の一部と、木郎活性塾の活動が両輪として補完しあいながら様々な活動を展開することになった。

ピノキオの活動シーズンは、6月第4土曜日に開催する音楽会に向けた練習から始まる。音楽会では、展示してある古い農具などを利用した季節の生け花展や、お茶会なども同時に行われ、地区の住民だけでなく、近隣市町村からも延べ200人近くが古い校舎に詰め掛ける。ボランティアセンターでは、企画のアドバイスをしたり、ポスター製作などの相談にのったり、出演者の紹介などにかかわる。音楽会前週の清掃活動などに、子どもたちが主体的にかかわれるようアドバイスをするのもボランティアセンターの役割である。音楽会が終わると地区の子どもたちを集めた「映画会」、夏休みの工作作りのための木工教室、ホームステイ中の留学生との交流会などを経て、秋の凧揚げ大会に向け六畳凧の製作にかかる。この時期が「ピノキオ」「アリスの会」ともに一番多忙な時期で、農繁期の合間を見て秋の音楽会の準備も並行して行うが、この時期、町内の各地区での文化行事にもボランティア参加するなど日曜日がほとんどふさがった時期でもある。また、秋の紅葉鑑賞も兼ねて、地元の珪化木公園から末次城址までの山道1km余りの除草、清掃活動で汗を流す。

これらの活動の中で、子どもたちは自分ができることを見つけて成長する。音楽会後の反省会のお皿の片付けだった小さな手が、マイクのセッティングや、ギター演奏をするようになる。別の手は、映画会や、音楽会のポスターのイラストを描いたり、ペンキだらけになりながら凧絵をぬったりしている。クリスマスには、手作りのクッキーやおもちゃなどを持って、地区の保育園児宅をまわり、サンタとなってプレゼント配りをする。活動を始めた頃は、プレゼントをもらっていた子どもたちが積極的に意見を出し合って企画をすすめるようになってきた。「アリスの会」が高齢者福祉施設や学童保育施設などを訪問に出かけると一緒についていき、ペープサートを持っているだけから、手話をしたり、大人に混じって真ん中で歌うなど積極的に参加するようになってきた。

子どもたちにはボランティアをしているという意識はなく、楽しむ中で自然に自分ができることを見つけるようになってきている。活動10年目を迎えた今年、活動のマンネリ化とメンバーの高年齢化が進み、小さかった子どもたちも成長し巣立つ時期を迎えた。しかし、大人に近づくにつれ夢を語るようになり、中には地元に残り活動の主体となろうとする子が出てきた。また、今年新しいメンバーが増え、新たな活動展開を考慮して行く時期に差し掛かっているようである。

コーディネートの実際

当該の二団体が、地区住民のニーズから自然発生的に組織され、自主活動を行っているた

め、当支援センターが直接支援にかかわることは少ない。活動自体も地域のしがらみにとらわれず、できることをできるだけ行うという形でもあるだけに、支援は単なるアドバイスにとどまることが多い。

当該団体が他団体との交流を強く志向していることもあり、音楽会などでは出演者の紹介、留学生との交流では、石川県で行っているジャパンテント事業の留学生受入家庭に当該団体との交流も紹介するなどの程度にとどまる。逆に、他の様々なイベントなどを企画する団体に対して積極的に当団体を紹介するなどしていたが、当町で進めているケーブルテレビ網の整備に伴い、自主的な交流の機会も多くなっていてセンターへの依存度は小さくなっている。

当該団体に限らず、行政が強くコーディネートするより、自主性に任せながら必要なときに頼ってもらえる存在として支援センターがあるべきであると考えている。

当該団体の活動は、年間50日を越える。しかし、決して無理な活動という意識はメンバーにはない。その証拠に、年々活動自体が変化・増加している。それは活動の多くが、メンバーの夢の実現を他のメンバーがバックアップするという形をとっているからで、活動にメンバー全員が参加するわけではない。仲間のために「できることをできるだけやる」というボランティアの考えが流れているからだ。だから、活動が急に磯遊びや、バーベキューに変化することもあり、どの活動も笑顔にあふれている。

ここまで当該団体の活動が活発に行なわれてきた大きな要因は、地域の活力だけでなく、地域そのものがなくなるのではないかという危機感からで、町村合併の流れの中で埋もれてしまいたくないとの意志が強く働いたものである。「水車の里」というネーミングも、木郎活性塾誕生の一年前に、地区住民が自力で地区のランドマークとなる水車小屋を建設したこと由来する。萱葺きの小屋を維持するため、11月の最終日曜日に今でも萱刈りが行われ、時間になると集合場所に自然に有志が集まってくる。また、毎年5月から11月までの8の付く日には、水車小屋の前で夕市が開かれ、地元で取れた農産物を安く提供し、提供した近所の人たちの生きがいも生み出している。

同じような地域おこしの考えは、町内のほかの地域にも同様に見られる。「春蘭の里」など、当地区より活発に地域づくりを志向している地域もある。

しかし、木郎地区が他の地区と違うのは「木郎活性塾」という共有の拠点があるという点である。「木郎活性塾」は利用者責任管理のため、いつでも連絡一つで集まることができ、自由な発想で企画や活動ができる場所であることが大きい。小学校の校舎ではなくなったにせよ、子どもたちも役割を感じながら時間を過ごすことのできる空間である。

これからの支援センターの役割として、生き生きと活動する当該団体などの活動を広く町内に紹介し、やらされるボランティアでなく、“見つけて動きはじめる”ボランティア、生涯学習ボランティアを町内に広める活動をめざしている。また、これらの活動で培った意識と経験を生かされる場を提供できるような連絡調整を目指していかなければならない。さらに、他に活動している団体の発掘と交流のための情報バンクとしての役割を担っていかなければいけないと考えている。

しかし、地域の特性として「出る杭はうたれる」的な考えがいまだに根強く残っており、様々な活動の障害となっている。ボランティア活動という言葉の理解も、空き缶拾い、清掃活動、施設慰問などが中心で「やらされる」的な意識がなかなか払拭できない。支援センターとして、地域住民への啓発活動にも、今後力を入れていかなければいけない。

また、今後の重要な視点として、子どもたちの安全安心確保という点での居場所確保が必要となってくる。しかし、当該団体の活動では、子どもたちが生き生きと活動する拠点としては機能するが、地域の子供達の安全安心確保という点では解決に直結しない。

この点に関しては今後更なる研究と実践を積む必要がある。

さらに、地域間交流、世代間交流を更に促進する拠点作りをする団体や活動を町内で発掘する活動を展開していきたい。

当該団体が中心となり、地域を離れ都会へ出て行った人たちの子どもや孫たちに、楽しい能登の夏休みを過ごしてもらおうという計画が進んでいる。実現までにはクリアしていかなければいけない壁が多く存在する。一番大きい問題は金銭面でありこの壁は高く険しい。また、当該団体のメンバーの年齢構成が実態にそぐわなかったり、専門的な知識においても更なるバックアップが必要となったりしてくる。このような面においても、当支援センターがこれから担うべき課題は多く、今後研究を進め、より有効な情報提供などのコーディネートを展開していきたい。



六畳風のロープを引く子供たち



今年の六畳風



みんなで記念撮影



秋の音楽会で合唱をしました



子どもも成長



近所のおばちゃんが見に来ます



活性塾前に桜の苗木を植えました



桜といっしょに成長



後ろが木郎活性塾

執筆者職・氏名：能登町教育委員会 生涯学習課派遣社会教育主事 新谷 信之